



CENTER NEWS



Contents

● JICAアフガニスタン国医学教育プロジェクト フォローアップ協力 2 講師 大西 弘高	● 2009年度東大医学部共用試験OSCE 5 教務補佐員 澤山 芳枝
● JICAインドネシア大学整備事業 2 特任研究員 片山 亜弥	● 鑑別診断を考えた身体診察法の実習 (HDPE) 5 講師 錦織 宏
● ラオス・セタティラート大学病院 医学教育研究機能強化プロジェクト 3 講師 大西 弘高	● 北京出張報告 中国科学院訪問 6 教授 北村 聖
● 第8回医学教育 国際協力研究フォーラム 3 特任研究員 片山 亜弥	● マレーシアIMEC出張報告 6 講師 大西 弘高
● 東京大学医学教育セミナー 4 事務補佐員 三浦 和歌子	● 入院プリパレーション絵本 『びょういんにおとまり』の翻訳出版 6 特任研究員 内田 浩子
● English Clinical Case Conference 4 講師 錦織 宏	● 外国人客員研究員報告 7 Dr Nurjahan M. Ibrahim MD, FAFP, FRACGP, Rebecca Harrison MD
● 模擬患者つづじの会 5 特任研究員 三木 祐子	● 離任挨拶 7
	● センター日誌/編集後記 8

JICAアフガニスタン国医学教育プロジェクト フォローアップ協力

カブールを訪れるのは、早いもので今回が8回目となる。今回は、2005年7月～2008年6月の3年間実施した技術協力プロジェクト「医学教育プロジェクト」のフォローアップ協力としての訪問であり、2009年4月13～23日の旅程であった。目的は、カブール医科大学における医学教育の現状分析、全国医学教育ワークショップの実施やその支援、2009年7～8月に実施予定であった本邦研修の内容や研修員の選定であった。

我々が3年間のプロジェクト期間の中で最も上手く導入できた内容は、PBLとCBL (Case-based learning: 症例に基づいた臨床医学の学習) の2つだったが、正直言ってこれらが上手く根付いてくれるのかについては若干の不安があった。CBLについては、今までやっていた教育の質向上という形であったため、全く無に帰することはないだろうが、PBLは全く新しい教育モデルの導入であったため、教員の協力が得られなくなって消滅しているのではないかと思えた。しかし、実際には以前と同じかそれ以上に続けられているのを確認できた。以前に比べると、英語の利用がはるかに増えていたし、議論もいきいきしているように見えた。学生の主体性を活かした教育を、少なくともPBLに協力してくれている教員たちはポジティブに受け止めてくれているようで、我々の気持ちが通じたような気がした。

全国医学教育ワークショップは、4月18～19日にカブール医科大学 (KMU) 図書館ホールにおいて、教育開発センター (EDC) とJICAが合同で開催した。参加者は地方大学からの12名を含む61名であった。テーマは、(1) 臨床技能教育、(2) 外来教育、(3) コース評価・教員評価を設定し、各テーマについて30分の講義、演習、全体討論を組み合わせ、参加者の主体的関与により理解を促進する構成とした。新たにEDCセンター長に任命されたDr. PirzadなどKMUの教員がいくつかのセッションを主体的に実施

講師 大西 弘高

できたこと、EDCの事務員たちが仕事を今も続けており、資料の印刷、部屋の準備など色々と手際よく手伝ってくれたことなど、爽りの多いものになった。

本邦研修については、KMUから6名、他の6つの地方大学から各1名の計12名が来日予定となり、内容は基本的臨床能力の教育と、EDC強化と決まった。KMUからの6名については現地で面接を実施し、Obaid学長との間でメンバーの調印に至った。

現地での活動日程は、1週間強しかなく、今回は臨床教育病院の視察に行く時間もないハードスケジュールであった。市街地は、以前よりも警備が厳重となり、銃を持つ警察官もやたらと目に付いたが、市場は戦争景気という感じで活気に溢れていた。そんな中で、アフガニスタンでの医学教育は地道な発展を続けているのが印象的であった。



▲ ワークショップにおいて実施されたOSCE様のデモンストレーション

JICAインドネシア大学整備事業

2008年2月に事業がスタートしてから、インドネシア大学が基本計画を決定するのに時間を費やしたため、事業は長い間滞っていたが、2009年3月によりやくコンサルタント選定手続きが本格的に動き出した。

事業は、ハードコンポーネント (大学付属病院の新築、医学部と歯学部の移設、公衆衛生学部と看護学部の改築等) とソフトコンポーネント (大学付属病院立ち上げ支援、医学教育支援) からなる。当センターは2007年に行った案件形成促進調査の経験を生かして、ソフト面から協力したいと考え、調査で一緒に設計会社や医療コンサルタント会社等とともに、コンサルタントの一員として入札に加わった。ソフトコンポーネントの一つである

特任研究員 片山 亜弥

大学付属病院立ち上げ支援には、学部間連携、院内感染防止、医療安全管理、病院の質改善、病院の国際認証があり、医学教育支援には、地方大学の臨床教育改善、地方大学や日本の大学との共同研究促進、日本での研修等が含まれている。各分野の専門家に協力を呼びかけ、5月1日に無事にインドネシア大学へプロポーザルを提出した。

現在はプロポーザル評価結果を待っているところであるが、これまでインドネシア大学と築き上げてきた深い親交を考えると、吉報が入るのを祈るばかりである。

ラオス・セタティラート大学病院 医学教育研究機能強化プロジェクト

講師 大西 弘高

早いもので、このプロジェクトも2007年12月に始まり、既に1年半以上が経過した。2009年1～3月は、教材作り、書籍購入、各種視察、カルガリー大学やコンケン病院などの協議に追われた。6月は、中間レビューへの対応、内部モニタリング、TOT (training of trainers) ワークショップなどであつと言う間の滞在であった。

6月24日には、中間レビューに関する発表を目的としたJoint Coordinating Committee会議が開催され、自立発展性については未知数な部分が残るものの、他は概ね高い評価となった。ラオス側カウンターパートも色々頑張ってくれていて、我々としてもやり甲斐のある結果であった。

臨床学習センターは、カンファレンスルームやスキルスラボの機能を併せ持つ4つの多目的室からなる。地元紙Vientiane Timesにおいて、ラオス初のスキルスラボとして報道されたが、6月30日にはTOTに参加した教員が実際に触れてみる機会を作ったところ、非常に好評であった。



▲ 臨床研修センターにおける教員の実習

● 進捗概要 (2009年1～7月)

3月3～5日	第2回Training of Trainersワークショップ
3月 6日	第1回保健省人材育成 technical working group出席
3月 10日	第3回Joint Coordinating Committee開催
6月 9日	第1回内部モニタリング実施(於保健省)
6月 24日	第4回Joint Coordinating Committee開催、中間レビュー報告書調印、臨床学習センター除幕式
6月29日～	
7月1日	第3回Training of Trainersワークショップ

■ センター教員の渡航

大西弘高講師(団長)	1月15日～2月10日、3月2～16日、6月3日～7月2日
北村聖教授	2008年12月24日～1月7日、6月18日～7月2日
錦織宏講師	2月9～26日

第8回医学教育 国際協力研究フォーラム

当センターは、医学教育分野の研究や国際協力による諸外国の保健医療への寄与について建設的かつ具体的に検討する場として、概ね年1回、医学教育国際協力研究フォーラムを開催してきた。この1、2年で、当センターの国際協力活動がアフガニスタン、ラオス、インドネシアと拡大してきたこともあり、今回は、「開発途上国における医療人材育成協力の重要性」をテーマに、各分野での専門家の取組みを知り、促進に向けた施策を議論した。

第一部の講演では、新JICAによる持続発展性と当事者意識を重視した取組み、医学教育グローバルスタンダードの導入による教育機関の質の確保、ベトナムやラオスにおける医療人材育成協力の試みについて話題が提供された。また、第二部のパネルディ

特任研究員 片山 亜弥

スカッションでは、深刻化する地域医療の問題にどう対処すべきか、対応策の一つであるタスクシフティング(医師から他職種への業務移管)をどう行うか、に議論が及び、開発途上国の課題と日本が抱える課題に関連があることを考える機会になった。

年度末にもかかわらず、44名の参加者にご出席いただき、最後はディスカッションの時間が足りなく感じられるほど質疑応答が行われ、盛況のうちに閉会した。



▲ パネルディスカッションの様子

<プログラム>

第一部 講演

～大学等による開発途上国における医療人材育成の取組みと課題～

- (1) 国際協力機構 人間開発部技術審議役 牛尾光宏 先生「国際保健における医療人材育成」
- (2) 東京女子医科大学 医学部医学教育学 吉岡俊正 教授「西太平洋地区医学教育連盟活動と医学教育の質保証」
- (3) 厚生労働省 臨床研修審査専門官 村岡亮 「ベトナムにおける保健医療分野の国際協力と医療人材育成」
- (4) 東京大学医学教育国際協力研究センター 大西弘高 講師 「ラオスにおける医学教育拡充の取組み」

第二部 パネルディスカッション

～開発途上国における医療人材育成の促進に向けた提言～

東京大学医学教育セミナー

事務補佐員 三浦 和歌子

昨年夏から月例行事となった「東京大学医学教育セミナー」は今年7月で13回目を迎えた。聴講者は毎回およそ30名前後、多い時で45名の盛況となる。最近ではレベッカ・ハリソン特任准教授による講演「米国における医師のワークライフバランス」(6月17日)への反響が大きく、男女共同参画を掲げる複数の機関から同じ内容の講演依頼があり改めてこのトピックへの関心の高さを知ることとなった。下表は12月から7月までに開催した医学教育セミナーの一覧である。通常、東京大学医学図書館333会議室を会場としており事前申し込み・参加費は不要なので、お時間の御都合のつく方は是非ご参加頂きたい。



▲ 医学教育セミナーでのレベッカ・ハリソン先生

問合せ先: 東京大学医学教育国際協力研究センター 03-5841-3583 E-mail: ircme-lec@m.u-tokyo.ac.jp

回	開催日	テーマ	講師
第6回	2008.12.11	Portfolios in Undergraduate and Postgraduate Medical Education in the UK	フィリップ・エヴァンズ 英国グラスゴー大学医学教育学 上級講師
第7回	2009.1.28	英国の医学教育概論 ～医学部新設・学士入学制度導入と新卒後臨床研修制度の導入～	錦織 宏 東京大学医学教育国際協力研究センター 講師
第8回	2009.2.18	日本の臨床教育の方向性 ～共用試験、国家試験、そして・・・～	北村 聖 東京大学医学教育国際協力研究センター 教授
第9回	2009.3.25	Outcome-based Medical Education: Having the End Product in Mind	ヌージャハン・モハメド・イブラヒム 東京大学医学教育国際協力研究センター特任准教授 マレーシア 国際医学大学 准教授
第10回	2009.4.22	Transition from Problem-based Learning (PBL) to Task-based Learning (TBL)	ヌージャハン・モハメド・イブラヒム 東京大学医学教育国際協力研究センター特任准教授 マレーシア 国際医学大学 准教授
第11回	2009.5.20	Academic Hospitalists Movement in the United States: Opportunities and Challenges for Patient Care, Education, and Research	レベッカ・ハリソン 東京大学医学教育国際協力研究センター特任准教授 米国 オレゴン健康科学大学 准教授
第12回	2009.6.17	Work-life Balance in Academic Medicine in the United States: A Mirror for Japan?	レベッカ・ハリソン 東京大学医学教育国際協力研究センター特任准教授 米国 オレゴン健康科学大学 准教授
第13回	2009.7.15	Value and Promotion of the Clinician-educator in the United States	レベッカ・ハリソン 東京大学医学教育国際協力研究センター特任准教授 米国 オレゴン健康科学大学 准教授

English Clinical Case Conference

講師 錦織 宏

当センターの活動の一つに、主に米国から外国人客員教員を招聘して医学教育に関連した内容の発信を行うというものがある。その教員に昨年度より、東大病院で総合研修センターとコラボレーションする形で、実際に研修医や医学生を対象にした症例検討会(英語)を実施してもらっている。本年度当センターに客員教員として来日されたのはオレゴン健康保健大学のハリソン先生とマレーシア国際医科大学のヌージャハン先生で、お二人に4月から7月まで週2回、毎回1時間程度、研修医・学生を対象にした症例検討会(English Clinical Case Conference)を実施してもらい、主に内科分野を中心とした診断推論の教育を行ってもらった。

東大病院は大学病院であるが故に、診断推論を中心とした初期診療を学ぶ機会が少ないという欠点がある。そのため昨年度は症例を集めることに苦慮したが、本年度は救急部の軍神助教の御協力を頂き、症例検討会に適した症例をあげてもらっ

た。またハリソン先生やヌージャハン先生の高いファシリテーション能力の影響もあってか、昨年より多くの学生・研修医に参加してもらったように感じている。

このような症例検討会の意義について参加者の意見を聞いてみたところ、やはり英語で行うということの意義を強く感じている学生・研修医が多かった。また診断推論の学習機会が少ないことも、参加の動機づけになっているようであった。国際化が進む現在、日本の将来のリーダーを育てるという東大のミッションを鑑みても、今後も何らかの形でこの症例検討会を続けていきたいと考えている。



▲ レベッカ・ハリソン先生の症例検討会

模擬患者つつじの会

昨年9月に模擬患者養成組織「模擬患者つつじの会」を東京医科歯科大学とコンソーシアムの形で発足させ、約半年間の養成コース（基礎編）を経て本年3月に無事第1期生16名が修了した。その後、本大学医学部医学科のM2学生の講義「模擬患者（SP）による医療面接実習総論」において、数名が模擬患者役として実際に授業に参加した。また医療面接実習に参加する先輩模擬患者の見学も行い、模擬患者としての役割、演技方、フィードバックなどの実際を学んだ。今秋には模擬患者として同実習に参加する予定である。

現在、本年3月に修了した第1期生は継続して養成コース（応

用編）を受講し、新シナリオを用いた演技やフィードバックの練習の他、OSCEについても学んでいる。また今春より第2期生12名が新たに加わり、会も一段と賑やかになってきた。今後は身体診察の授業や、看護学などの分野においても活躍できる模擬患者養成を計画している。



▲ 模擬患者つつじの会第一期生との親睦会

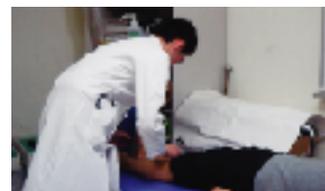
2009年度東大医学部共用試験OSCE

2009年度の本学共用試験OSCEは2月7日（土）に行われ、東大医学部医学科のM2学生 97名が昨年同様午前・午後に分かれて受験した。医学教育関係者にはもうすっかりなじみになったOSCE（Objective Structured Clinical Examination、客観的臨床技能評価の略）だが、本年も共用試験実施評価機構のやり方に従い、当センターがその運営の主を担う形で実施している。東大医学部M2（4年生）の受験生は緊張しながら6ステーション（医療面接・頭頸部診察・胸部診察・腹部診察・神経診察・救急）の与えられた課題をこなしていた。運営は、当日は評価者が計72名、模擬患者が計40名、医学部事務が計27名、

特任研究員 三木 祐子

センターより計4名という大規模な人数が関わった。また今年は医学部の小池和彦教務委員長や当センター特任准教授のヌージャハン先生などにも関わっていただいた。

今後、国家試験にも導入が検討されているOSCE。運営はとて大変だが、受験を終えた学生さんの笑顔を支えにしながら、来年以降も引き続き当センターが主に関わっていく予定である。



▲ OSCE（神経ステーション）の様子

鑑別診断を考えた身体診察法の実習（HDPE）

当センターでは、東大医学部医学科のM2学生を対象に医療面接や身体診察の教育に関わっている。特に身体診察の授業ではシミュレーターを用いた教育を実施してきたが、昨年度よりその内容を一部変更し、鑑別診断を考えた身体診察法（HDPE；Hypothesis-driven Physical Examination）と呼ばれる教育法を導入した。この学習方法は当センターに以前助教授でおられた大滝純司先生（現東京医科歯科大学医学教育学講座教授）と客員教授として滞在されたジョージ・ポダージ先生（現イリノイ大学シカゴ校医学教育学講座教授）が当センターで開発した教育法で、私も開発当初より研究チームの一員として関わってきている。この

講師 錦織 宏

授業では、学生はまずシナリオを配布された後に3つ鑑別診断を与えられ、その鑑別のために必要な身体診察をとるように指示される。身体診察の手技だけではなく、どうしてその診察を行うのか、またその所見をどのように診断に反映させていくのかを学生は学ぶことができる。

現在モデル授業の開発にまで研究が進んだところであり、カリキュラム評価や学生の評価の方法の開発を進めているところである。このように、医学教育研究を実践に移すという形は当センターのミッションから考えても望ましい。本教育は国際的にも通用する内容であり、引き続きさらに研究を進め、報告していきたいと考えている。

北京出張報告 中国科学院訪問



教授 北村 聖

平成21年1月28日から2月1日まで、北京に出張した。従前より参加している「新興・再興感染症研究拠点形成プログラム」の一環として、中国における大学院教育ならびに科学者養成プログラムの研究をしている。今回は、科学者をめざす高校生に対する教育を調査した。

中国では、理科系を目指す高校生は夏休みや冬休みに実際の大学や研究所を訪問し、いわゆるインターンを経験するものが多い。その仕組みを、中国科学院でインターンをした高校生と高校教員にインタビューした。

中国では、高校から大学へ進学するためには、高校での課外活動が高く評価されるというので、高校が正規のプログラムとして大学の研究室で研究することが一般に広く行われている。もちろん、高校生

ゆえ、それほど高度な研究はできないため、受け入れる側で結構なお膳立てが必要である。短い機関であるが研究した結果は高校で発表され、それなりに優劣がつけられ大学進学の際の評価項目になる。

今回、インタビューした女子高校生(中央)は優秀で英語も流暢で、日本の高校生よりも将来設計を考えているようであった。将来は研究者か医師になりたいそうで、留学は米国を目指しているとのこと。今、中国の理科系の高校生、大学生には日本は留学先として人気がないようである。

余談であるが、インタビューには両親も同席されていた。一人っ子政策で、子供を花よ蝶よと猫かわいがりしている。



▲ 中国 高校生との写真

マレーシアIMEC出張報告

IMEC (International Medical Education Conference) は、以前私が勤めていたマレーシアInternational Medical University (IMU) において毎年開催されている医学教育の国際的会合であり、今年で第6回を数える。4月2~3日のカンファレンスは、「Reflections on Innovations」というテーマで東南アジア地域での医学教育改革を振り返っていた。私の主な役割は、4月1日に開催されたpre-conference workshopにおいてAssessing clinical competenceのセッションを切り盛りすることであった。

私がIMUで2003~05年に働いていたときに最も力を費やしたのは、IMUの臓器系統別hybrid PBLカリキュラムをoutcome-based educationのモデルに適合させることであった。すなわち、学部内でアウトカムの設定をし、それぞれのアウトカムに見合った

講師 大西 弘高
評価ツールを割り当てていくことで、卒業時の達成度をより客観化できるようにするプロジェクト的な仕事であった。よって、上記pre-conference workshopのテーマは、私が取り組んでいた内容を例として用いることができるので、様々な参加者からの意見に対しても、比較的余裕を持って対応できたと感じている。

今回最も目新しかったのは、新設される歯学部に伴い、急ピッチで工事がなされている歯科実習スキルスラボであった。一度に約100人が1人ひとりのファントムで実習できるように設計されるようで、この地域では最大規模のものになるのではという謳い文句であった。



▲ 歯科実習スキルスラボ

入院プリパレーション絵本『びょういんにおとまり』の翻訳出版

2009年4月、絵本『びょういんにおとまり』(バラージュ・アンナ著、風濤社)を翻訳出版した。原著は1982年にハンガリーで出版され、入院する子どものストレス緩和に取り組んでいた小児科医の著者が入院中に遊びながら病院体験について学べる本が必要であるとのことで出版した本である。

本の内容は男の子が扁桃腺の手術のために入院~検査~手術~退院を経験する。入院している子どもが遊べるようにとの配慮から検査体験や病院の先生について読者にも問いが発せられる。絵本は、子どもの目線で体験することが、詳細に書かれており、その内容は聴診・打診などの一般小児科診察、血圧測定・

特任研究員 内田 浩子
心電図・採血・レントゲン・眼底検査など主に術前検査について多岐にわたる。さらに麻酔全投薬についても、のどの湯きや眠気などの体験が描かれている。子どもの反応の描写が細かく、子どもの感じるであろう不安な思いと初めての経験を通して、成長する子どもの様子が描かれている。

入院する子どもや大人へのお見舞い本として、また、小児科外来や病棟で子どもに読み聞かせるなど活用いただきたい。



▲ びょういんにおとまり

外国人客員研究員報告

Dr Nurjahan M. Ibrahim MD, FAFP, FRACGP,

I am Nurjahan M. Ibrahim, Associate Professor in Family Medicine from the International Medical University (IMU), Malaysia. I was invited to serve as a Visiting Professor (VP) by IRCME, University of Tokyo (Todai) for four (4) months from February to May 2009.



It has been an honour and privilege to have worked with the students, staff and faculty of Todai and other institutions in Japan. During my tenure, I had the opportunity to observe teaching and assessment, engage in discussion with medical students, residents and faculty, deliver teaching sessions to students and residents as well as lecture on themes related to current trends in medical education. Other than visiting the University Hospital of Todai, the Kameda Medical Center and Tokyo Medical University Hospitals, I had the privilege of visiting community health / family medicine facilities utilised for resident training in Family Medicine within as well as outside Tokyo as well as Japanese homes on home-visits accompanied by a healthcare team.

It has been an extraordinary experience working in Japan. I marvel at the work culture and dedication of all that I have had the opportunity to observe and work with. I wish to thank each and every faculty and staff member especially at IRCME and Todai for their kind hospitality. My sincere best wishes to Todai and IRCME in their remarkable endeavour to promote high quality medical education. I wish you greater and continued success.

Rebecca Harrison MD

I am Rebecca Harrison MD, an internist and clinician-educator from Oregon Health & Science University, located in beautiful Portland, Oregon. I would like to extend my sincerest thank you to the IRCME staff for providing such support and guidance during my 4 month stay at Tokyo University. My time here was extremely interesting and fruitful. One of the most meaningful work related experiences was having the opportunity to create a clinical case conference series with Tokyo University medical students and residents along with the support of the IRCME and residency education office. The students and residents did a fantastic job creating an interactive learning environment and my hope is that the conference will continue in the future. I also gave three formal lectures on topics of "hospital medicine," "work-life balance in academic medicine," and the "clinician-educator pathway." I was honored to have the opportunity to work with the visiting physicians from Afghanistan, and participate in resident and student clinical case discussion with Dr Hagino from the department of rheumatology. My three children also were able to attend kindergarten and second grade here which was great for their Japanese! Thank you for all of the kindness you have all us during our stay. I will miss you all!



離任挨拶

客員研究員 杉本 なおみ

本務校の特別研究期間制度により、2008年度1年間、本センターにて協働させて頂きました。期間中はひとかたならぬ高誼にあずかり、誠にありがとうございました。みなさまが温かく迎え入れ、公私にわたり分け隔てなくお付き合い下さいましたおかげで、大変充実した研究生活を送ることができました。

医学中央図書館棟改築完了に伴う移転に始まり、ラオス・アフガニスタン合同研修や、ラオスへの出張とさまざまな体験をさせて頂きました。また、各国からの客員教授・研究員の方々との交流、臨床推論や医学生の異文化体験といったセンター教員のみなさまとの研究、そして医療面接実習や模擬患者養成といった教育業務への参加を通じて、かけがえのない経験を積ませて頂いたことに心より感謝申し上げます。

今後も、この貴重な機会から生まれたそれぞれのつながりを大切に、みなさまとご縁を活かした協働が続くことを願ってやみません。末筆ながら、北村聖先生はじめみなさまのますますのご清栄を、ここ湘南の地よりお祈り申し上げます。

特任研究員 横井 久美子

2008年9月1日から2009年3月31日までという短期間、特任研究員としてセンターに勤務しました。他大学との兼務で、時間のやりくり非常に苦労しつつも、研究助成申請したものが1件採択され、手ごたえも感じました。

今年度は、他大学特任教授のかなり多忙な職に専念です。しかし、そこでは医学教育の研究は業務内容に含まれておりません。あくまでも余暇の範囲内で、採択されたテーマの研究をやり遂げることができるのか、睡眠不足の連続です。

特任研究員 山邊 昭則

3月にセンターを離任し、4月から東大の別の教育部門で勤務を開始しています。在任中はお世話になりました。異なるバックグラウンドの皆様とご一緒する機会に恵まれ、これまでアンテナを張っていなかった様々な話を聴くことができました。また医学生の皆さんと毎日冗談を言い合いながら一緒に研究を行った機会も最も楽しい思い出のひとつです。皆様ありがとうございました。また何か機会がありましたらどうぞよろしく願いたします。センターの益々のご発展をお祈りしています。

● 今後の外国人客員教授招聘スケジュール

センター外国人客員教授として、次の先生をお迎えする予定です。

Kanokwan Sriruksa, MD, DMEd (タイ王国コンケン病院 医学教育センター Assistant Director、同病院 小児科医師)
招聘期間:2010年3月1日~3月31日(予定)

なお、欧米からの外国人客員教授の招聘にあたり、野口医学研究所に多大なご援助を賜りましたことを感謝申し上げます。



● センター日誌 | 2008年12月～2009年6月 |

2008 12 DEC		3 MAR	
(11月18日～)12月18日 12月11日	JICAラオスプロジェクト現地活動(大西) 第6回東京大学医学教育セミナー (フィリップ・エヴァンス 英国グラスゴー大学医学教育学上級講師)	3月 2日～16日 3月 4日	JICAラオスプロジェクト現地活動(大西) 平成20年度「つつじの会」模擬患者養成コース第5回実施(東京大学) (東京医科歯科大学では3月16日に実施) 第8回医学教育国際協力研究フォーラム 第9回東京大学医学教育セミナー (ヌージャハン・モハメド・イブラヒム マレーシア国際医学大学准教授)
12月17日	平成20年度「つつじの会」模擬患者養成コース 第2回実施(東京大学) (東京医科歯科大学では12月22日に実施)	3月19日 3月25日	
12月24日(～1月7日)	JICAラオスプロジェクト現地活動(北村)		
2009 1 JAN		4 APR	
1月 5日～30日 1月14日	M1フリークォーター 平成20年度「つつじの会」模擬患者養成コース 第3回実施(東京大学) (東京医科歯科大学では1月19日に実施)	4月 1日	レベッカ・ハリソン オレゴン健康科学大学准教授 特任准教授着任(7月31日まで)
1月15日(～2月10日) 1月26日	JICAラオスプロジェクト現地活動(大西) 共用試験OSCE(M2)実施	4月13日～23日 4月15日 4月21日(～7月17日) 4月22日	JICAアフガニスタン医学教育プロジェクトフォローアップ協力現地活動 診断学実習FD English Clinical Case Conference(毎週月曜日・金曜日)実施 第10回東京大学医学教育セミナー (ヌージャハン・モハメド・イブラヒム マレーシア国際医学大学准教授)
1月28日(～2月1日) 1月28日	中国・新興/再興感染症研究拠点形成プログラム調査(北村) 第7回東京大学医学教育セミナー (錦織 宏 東京大学医学教育国際協力研究センター講師)		
2 FEB		5 MAY	
2月 1日	ヌージャハン・モハメド・イブラヒム マレーシア国際医学大学准教授 特任准教授着任(5月31日まで)	5月18日	平成21年度「つつじの会」模擬患者養成コース第1回実施 (東京医科歯科大学)
(10月27日～)2月2日 2月 2日～27日 2月 4日	身体診察実習(M2)実施 M1フリークォーター 平成20年度「つつじの会」模擬患者養成コース 第4回実施(東京大学) (東京医科歯科大学では2月9日に実施)	5月20日 5月20日(～10月28日)	第11回東京大学医学教育セミナー (レベッカ・ハリソン オレゴン健康科学大学准教授) 医療面接実習(M2)実施
2月 7日 2月 9日～26日 2月18日	共用試験OSCE(M2)実施 JICAラオスプロジェクト現地活動(錦織) 第8回東京大学医学教育セミナー (北村 聖 東京大学医学教育国際協力研究センター教授)		
2月27日	平成20年度第3回運営委員会	6 JUN	
		6月 3日(～7月2日) 6月17日	JICAラオスプロジェクト現地活動(大西) 第12回東京大学医学教育セミナー (レベッカ・ハリソン オレゴン健康科学大学准教授) JICAラオスプロジェクト現地活動(北村)
		6月18日(～7月2日) 6月22日	平成21年度「つつじの会」模擬患者養成コース第2回実施 (東京大学)

編集後記

見上げれば秋雲が広がり、季節の移り変わりを感じる今日この頃となりました。
今期国外では、ラオス、アフガニスタンを舞台に精力的な医学教育活動を繰り広げてまいりました。

一方、国内では2名の外国人客員教授の受け入れ、第8回医学教育国際協力研究フォーラムの開催、東京大学医学教育セミナーの実施、東大病院内でのEnglish Clinical Case Conferenceなど、イベント盛りだくさんの期間であったように感じております。

今後ますます賑やかになるセンターの活動にどうぞご期待くださいませ。(岩)

発行元

発行 2009年9月1日
 発行人 山本 一彦
 発行所 東京大学医学教育国際協力研究センター
 〒113-0033 東京都文京区本郷7-3-1
 TEL.03-5841-3583 FAX.03-5841-0254
 E-mail: ircme@m.u-tokyo.ac.jp
 http://www.ircme.u-tokyo.ac.jp
 印刷所 三鈴印刷株式会社